

大手ふって語る母校 (※1)第6回卒 清水 みつ (※2)

思い出多い中村実践女学校に入学したのは、本当に古い 63 年も前の昭和 2 年 4 月だった。あの古い校舎や先生方の顔々が、今、目の前に浮かんで来る。荻宿 (※3) 校長先生をはじめ、大内 (※4)・一條 (※5)・長谷川 (※6)・田中 (※7)・増尾 (※8) の諸先生ですが、ほんとうに懐かしい先生方だ。

学校は今の市体育館の北にあり、周りはヒバの垣根にかこまれ、正門は西で南向の玄関は老松の植えこみの所にあった。生徒は東昇降口から出入りした。私共の学年には 78 名入学、服装は紺無地の筒袖の長着袴に白足袋。かばんはなく風呂敷包みをご生大事に持つという風情で、今からみるとおかしく思われる。でも、当時はまじめそのものだった。学年は 2 組にわかれ、1 組は一條先生、私の 2 組が増尾先生の担任。私の教室は東昇降口のすぐ隣。2 年生の教室は西端の南・北の教室で、祝祭日の行事や式などの時に、間のフスマを外して広くして使った。机は裁縫のぼん板に 2 人座って勉強した。

授業の始め終わりには、正しい姿勢で座礼、特に一條先生からのお作法・お茶のいれ方・掛軸のかけ方などきびしく学習。2 年間だけだったが 10 年 20 年にも匹敵する内容あるご指導でした。

その後 3 年間、上の学校で学び、大勢の方々とおつきあいし、社会に出てからも今日まで、お陰様で一度もはずかしい思いをしなかったです。本当に有難いことと常に感謝し暮らして来た。

・・・・・・・・ 後 略 ・・・・・・・・

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998 (平成 10) 年 7 月 6 日発行〉「第三章 中村高女」より。

(※2) 中村出身。昭和 4 (1929) 年卒。東北女子職業 (師範)。

(※3) 荻宿 諭。

(※4) 大内ヨシ。

(※5) 一條ヒデ。

(※6) 長谷川キヨ。

(※7) 田中ミツ。

(※8) 旧姓 増尾、福島キヨ。飯豊出身。中村高女第 1 回、大正 13 (1924) 年卒。かもしれない？

昔の学校行事など (※1)

第7回卒 村岡 スサヨ (※2)

..... 前 略

肩かけカバンを肩にかけるようになって、学校行事で思い出すのは (1) 速縫競争 (肌じゅばん・単衣長着) (2) 製作品展示会 (3) 卓球・テニス学級対抗試合などだ。

不景気そのものの時でしたから、教材をそろえるのも容易でなく、与えられたものは最後まで仕上げたものだ。年2回位の映画鑑賞も、1回ぬいて教材のおくれをとり戻しました。バスもなく、自転車はぜいたく品とされた時代で下駄の歯をへらして遠い道を歩いて欠席もしなかった。

..... 後 略

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998 (平成10) 年7月6日発行〉「第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 磐城。中村出身。昭和5 (1930) 年卒。

半世紀前の思い出 (※1)

第8回卒 青木 久江 (※2)

昭和6年の頃は、校服が紫色の無地(?)の着物に、えび茶の袴・白足袋だった。靴もはいて良い事になっていた。世の中はのんびりと暮らせたし、春は校門を出ると桜が咲いて、満開の時はとても美しい眺めであった。

学生生活の思い出の中でも家庭科実習時間は楽しい事が一ばいあった。バナナヨーカンを作ることになり、私たちグループの6人は、先生の指導よりも、バナナをよけいに入れてお砂糖も倍にして入れた。先生の試食が始まり他の組より大変良くできたので、他の先生にも試食していただきますので.....と、半分職員室に持っていかれ、皆で顔を見合わせてショボンとなった。

又、お作法の時間は全員正座して自分の番を待つので、名前を呼ばれて立ち上がったとたん、足がしびれて、よろよろぼったり倒れ先生に叱られるのを見て、叱られないように袴を拡げ横座りして待っていて、自分の番は無事にすませたこともあった。

運動会の楽しい思い出も懐かしいし、卒業の謝恩会に私が『春雨』の踊りをやり、アンコールがあったのに、2番目のときは恥ずかしくて踊れなかったことも今では楽しい思い出になっている。卒業以来クラスの皆様にお目にかかる事もなく、名簿で仲良しだったお友達が、天国に旅立たれた事を知り、淋しさも一入である。

..... 後 略

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998 (平成10) 年7月6日発行〉「第三章 中村高女」より。

(※2) 中村出身。昭和6 (1931) 年卒。

気をつかった身支度 (※1)

第11回卒 武島 ルメ (※2)

中村町を中心に近在から入学した級友は 40 人位だったと思う。教室は西校舎の南と北の 2 教室にわかれ、私は南の校舎で今は亡き一條 (※3) 先生だった。北の 1 組は製糸工場の蒸気機関の音やまゆの臭いがひどいものだった。

校風にも慣れていよいよ裁縫の授業に入り基礎の運針が始まった。先生の合図で運針用布を手にしても針は仲々進まず、針目が曲がる等皆についていけるだろうか、家で一生懸命練習したものだ。

細目の作品に細目帳にそえて提出。細目帳には先生の甲・乙などの評価が記され、注意等も書かれてあって、一喜一憂したりだった。手芸のレースあみなど、仕上げる頃は白のレース糸が黒ずんだものである。

教科は 9 科目だったと思う。外に自由科目の生花などがあつた。一番気をつけたのは身支度だった。半衿・たびはいつも白白と洗濯し、緒ずれをさすのも一苦勞だった。殊に作法の授業のある日は、袴を寝おししたり替えのたびを持って行ったり、作法の先生には気をつかった。

南校舎の西側には園芸の実習地があり、チューリップ・アネモネ・ヒヤシンスなど季節の花が咲き、花壇はいつもきれいに手入れされていた。

その外、祝日は第二小学校講堂（女子）で、運動会は二の丸で小学校といっしょだった。運動着はアルバムによると、白の開衿シャツ、短めのスカートに黒の靴下とズックばきで、髪を丸めた人、長い三つ編みのおさげの人など、古いあの頃がなつかしく思い出される。

・・・・・・・・ 後 略 ・・・・・・・・

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998 (平成10) 年7月6日発行〉「第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 中野。飯豊出身。昭和9 (1934) 年卒。町立中村実践女学校 (本科)。

(※3) 一條高麗 (コマ)。